

Title	人文地理學原理 上巻(ブラーシュ著, 飯塚浩二譯, 岩波文庫版)
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.175(377)- 176(378)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

し、美麗な壁畫が發見され、同年故濱田教授は梅原氏を滯同して之を檢分し、次いで昭和十年と十三年に汎り、兩度の調査がなされ、本書の公刊を見ることとなつた。古墳は現在後圓基底の徑約百七十尺、その高さ約三十尺あり、前後の軸は現在最長二百二十尺餘に上り、三段に築造せられ、空渾を繞らし、外部的な裝飾として葺石及び埴輪圓筒を有してをる。横穴式石室はその後圓部にあり、主室内に棺床や、之を被覆する特殊な石屋形の架構あり、棺床の上には二人を伸展葬する設備あり、また石枕二個が室内に置かれてゐた。本石室をして顯著ならしめたのは主室四壁と前室の正面に華麗なる繪畫が描いてあることであり、馬、靱、楯、刀、弓、双脚輪狀文、蕨形、三角形、珠文が赤、綠、黒、黃の四色で彩られ、遺物としては土器、玉類、裝身具、鏡、武器、馬具等が發見せられてをる。本古墳は、石神山、岩戸山古墳と聯關あり、此二古墳の何れかが繼體天皇の朝に北九州に反した磐井と結びつけられる所から本古墳の年代もそれに近い頃に比定することが出来る。著者はかう結論して最後に壁畫の意味を考核し、その靱、楯の類は奥城に於て外から來るものをプロテクトするものではないかと推し、双脚輪狀文に就ては之をマジカルの意味に解したいがなほ疑ひを存するとして解決を將來に期してをる。

本報告書の價値は原色版により、室内の壁畫を明瞭に傳へた點にあり、此點學界の感謝に價する。一體九州裝飾古墳の文様の色調と云ひ様式と云ひ極めて特異のものあり、之を北方大陸の類似古墳のそれによつて説明し去ることは不可能である。もしその比較を他に求むれば太平洋の土俗的資料に近似が見出だし得やう。

その三角や厥形、珠文の類も之を塙の小口に印した文様と比較する外に、他山の石としてもつと廣範圍な土俗資料の中に類似例が求めらるべきである。古代日本の文化には太平洋的文化の匂が多分に含まれてをり、一應かゝる系統の究明が行はれて後九州古墳裝飾文様の解釋に或種の光明が投ぜられるのではないかと思ふ。
(松本信廣)

人文地理學原理 上卷

フラーシユ著、飯塚浩二譯
岩波文庫版

近世フランスに於ける人文地理學の開祖ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシユの代表的著作なる『人文地理學原理』は、我が國にも既に前から紹介されてゐるが、今回こゝに完譯の上梓を見たことは地理學並びに史學に従事する者にとつて大なる喜びとする所である。

原著者は一九一八年に歿し、本書は遺稿として未完のまま残されたものを、高弟マルトンヌにより編纂せられ、一九二二年にパリのアルマン・コーラン書店から發行されたものであり、編纂上の勞苦並びに本書の價値に就いてはマルトンヌの序言に明かにせられてゐる。いふまでもなく著者は十九世紀に至つてドイツに成立した近世人文地理學の學説を繼承しつゝ、更に歴史の見地の重要性を力説することにより、ドイツ地理學派の陥らんとした決定論より人文地理學を救ひ、これに新たな意義を賦與するに至つたのであり、本書は著者の圓熟せる見解を縦横に述べたものであ

る。世界の隅々より蒐集せる過去、現在にわたつての豊富な資料を背景に、一貫せる著者の見地が展開される。そこには例證なき假説は一も無く、あまりに多量の内容を壓縮せるため、卒讀よりは精讀によつて、はじめて理解せらるべく、かくて豊富な示唆を與へられるであらう。

本譯書は巻頭に詳細な解題を附して、原著者の學的地位を地理學史の上に明かにし、譯文も、いづれかといへば難解なる原著をよく消化して理解し易く努められた苦心の跡を察することができ。本書の全譯は、かつて昭和八年に山口貞夫氏によりて『ブライシユ人文地理學』なる題下に古今書院より刊行せられてゐるが、いま飯塚氏の譯書と比較するならば、部分的に見た範圍内であるが、誤譯が多い。ブライシユの本書に就いては決定的に今回の譯書を推薦すべきである。下巻が速かに完成せられんことを待ちつつ、紹介の筆をとゞめる。(平山榮一)

隨 筆 北 京

(奥野信太郎著
第一書房發行)

從來北京の風物を世に紹介した文章は必ずしも尠しとしないけれども、專著の形に於て纏まつたものを擧げるとなれば纔に中野江漢氏の「北京繁昌記」三冊(大正十一年—十四年)、村上知行氏著「北京」(昭和九年)、石橋丑雄氏著「北京遊覽案内」(昭和十一年)、林富喜子夫人著「古金欄」(昭和十四年)等を數へ得るに過ぎない。然もその或ものは既に内容に可成りの改訂を必要とするものであり、又或ものは觀光客相手の片々たるガイド・ブックの

類であるなど、吾人の欲求を滿すに足るものは甚だ求め難い有様であつたが此度「隨筆北京」の刊行を見るに及んで筆者多年の渴望は漸くにして醫せらるゝを得た感が深い。

本書は、現在わが慶應義塾文學部に於て支那文學を講じて居られる著者が、昭和十一年より十三年に至る二ヶ年間の北京遊學より歸られて後、求めらるゝ儘に思ひ出の北京生活を語られた記念すべき一卷である。遊學半にして盧溝橋事件の勃發をみ、世紀の一大轉換期を彼地に過された事は今にして思へば千載一遇の機會に恵まれたといふべく、また事變を契機として急激な變貌を示しつつある古都北京のありし日の閑雅な情趣に心適くまで浸るを得られたのも「隨筆北京」を世に送らんが爲の天の優寵と考ふべきではなからうか。收むる所總て二十篇の中、直接事變を描いたものは「その前夜」「籠城前後」「北京籠城回想記」の三篇である。

既に一觸即發の危機を傳へられてゐた事變の直前に於てすら北京は存外平穩だつた事が語られてゐる。著者は事變の性質だとか前途だとかに關して、議論めいた所見などは一切述べず、専ら身邊の出來事をルポルタージュ風に寫された事が却て實感を盛り來つてゐる。次に味覺の世界を描いた「燕京食譜」と「小吃の記」の二篇は讀者をして文字通り垂涎に堪えざるを覺えしめる。北京の宴席料理の豪華を説く人はあつても、家常飯や小吃の食味を説き得たものは他にその例を聞かない。代用食の強調せられつつある現下の我國に餃子・燒餅・拷花捲兒・炒醬麵の類を紹介すれば必ずや喜ばれるに相違なからう。著者も言はれる如く北京は天下の食味を中心であると同時に演劇の中心でもあり、北京人士の芝居